中等教育機関日本メキシコ学院での『まるごと』導入について
-中高生が考える『まるごと』で学ぶメリットとデメリットを中心に-

山本　惠
日本メキシコ学院

１．はじめに

日本メキシコ学院（以下、リセオ）では、2012 年８月より国際交流基金メキシコ日本文化センター（以下、JFMC）と共催で『まるごと　日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）を使用した授業を行っている。

リセオは、1977 年に「日本メキシコの両国民の相互理解の増進と教育文化の交流を図り、人類の連帯感を育み、世界の平和と繁栄に貢献し得る国際性豊かな、且つ両国民にとって有為な人材を育成すること」を学院の目的と建学の精神として、日本の田中角栄元首相とメキシコのエチェベリア大統領（当時）の合意の元、メキシコのメキシコシティに設立された。元々あったメキシコ日本人学校を母体に、日系人コロニーにあった日本語学校をひとつにしたのがリセオである。リセオには、主に日本人の生徒が通う、日本の文部科学省のカリキュラムに基づく「日本コース」（幼稚部・小学部・中学部）と、日系人も含めたメキシコ人の生徒が通う、メキシコ教育省のカリキュラムに基づく「メキシココース」（幼稚部・小学部・中学部・高校部）が同じ敷地内に併設されている。そのメキシココースでは、幼稚部から高校部までの全教育課程でスペイン語、英語、日本語の３言語が必修科目として義務付けられている。日本語に関しては、元々は日系人への継承語教育を行う目的が強かった。現在、幼稚部では歌や簡単な挨拶などを中心に、小学部ではリセオオリジナルの教科書を使用して日本語教育が行われている。高校部では 2012 年８月、中学部では 2013 年８月から 2015 年７月まで「みんなの日本語」か『まるごと』を使用して授業が行われており、高校部では日本語か Japonología（日本学）(1)のどちらかを選択することができる。

2.『まるごと』導入の目的と経緯

2.1　リセオの日本語教育の目的

リセオ日本語教育部では「日本語教育を通して日本の文化や生活・習慣などについて深い理解を持ち、メキシコ・日本の友好関係の架け橋となること。さらに国際社会にあって広い視野で考え、その一員としての責務を自覚しうる人材の育成をする。」を教育目標としている。『まるごと』導入前から「会話力の向上」を目標に掲げていたが、実際は『みんなの日本語』を使用した文法中心のカリキュラムになっていて、生徒が日本語を「話せる」には至っていなかっ

た。また、リセオの生徒の環境を考えると、日本在住の外国人学習者を対象にした『みんなの日本語』の使用継続に疑問があった。そこで、

・日本語の文法がわかる生徒から、日本語が話せる生徒に

・「課題遂行能力」の向上

・「異文化理解能力」の育成

・異文化に親しむだけでなく、自国の文化を振り返る視点を養う

と目標を具体的にし、それらに沿っている『まるごと』を導入するということになった。

2.2　リセオの『まるごと』クラスの概要

2012 年にリセオに『まるごと』を導入して、今年の７月で丸３年が経った。１年目は高校の新入生クラスの１クラスを対象に導入し、『まるごと　入門』（以下、A1）の 15 名しかいなかった生徒が、３年間で A1 から『まるごと初級２』（以下、A2-2）までの３レベル、11 クラスで学習者数は計 130 名にまで増えた。リセオの『まるごと』使用クラスの基本情報は以下の通りである。

表１　リセオ『まるごと』クラス基本情報

	中学	高校
実施コースのレベル（クラス数）	A1（６クラス） A2-1（２クラス）	A1，A2-1，A2-2 （各１クラスずつ）
学期数	５学期	４学期
授業時間	50 分×４～５コマ／週 ※だいたい週に１コマ日本文化の授業が入るため	50 分×４コマ／週
総時間数	50 分×117 コマ＝約 97.5 時間	50 分×92 コマ＝約 76.7 時間
	※但し、クラスや年度によって誤差あり	
授業担当講師	報告者および報告者以外の教師３人	
１クラスの学習者数	９～14 人（クラスによる）	７～11 人（クラスによる）
学習者の属性	中学１，２，３年生	高校１，２，３年生
使用教材	『まるごと　日本のことばと文化』	

リセオではどのレベルでも「かつどう」と「りかい」を１課ごとに交互に教えている。2014-2015 年度のカリキュラムでは、A1 では、１課を「かつどう」２コマ、「りかい」３コマで進み、１年間（５学期または４学期）で９トピックが終了する。A2-1 と A2-2 は「かつどう」３コマ、「りかい」４コマで進み、1.5 年で９トピックが終了する。

３.『まるごと』使用実践について

3.1 『まるごと』を使った授業での工夫

『まるごと』を使用して中高生に授業を行うにあたり、教師が気を付けていることや工夫していることについていくつか紹介する。

まず１つ目は“褒める”ということだ。メキシコ人は元々褒められて伸びるというタイプの人が多い。中高生も褒められて頑張るという生徒が多い。リセオの中学での日本語の授業は、各学年で時間帯が違うのでクラスの中に違う学年の生徒が混ざることはない。しかし高校での日本語の授業は全学年共通の時間割になっているので、１クラスに高校１，２，３年生が混ざったクラス編成になっている。そのため特に年長者が理解に時間がかかる生徒やできない生徒を教えたり助けたりという姿がみられ、できない生徒を馬鹿にするようなことはない。一方、中学生は母語の言語的な知識量によって、日本語の文型や表現を理解するのが大変な生徒もいる。クラスにそういった生徒がいると、特に中学１年生や２年生では他の生徒がその生徒を助けるというよりは、馬鹿にする方が多い。また、ペアでの活動を楽しんでする生徒もいれば、ペアの一方がきちんとやらないのでもう一方が嫌な思いをするということもある。そんな時には、クラスメイトに教えてあげたり助けてあげたりした生徒を大げさに褒めることで周りが刺激され、褒められた本人ももっと頑張るので全体にいい影響を与える。

２つ目は活動にバリエーションをもたせるということだ。例えば「かいわとぶんぽう」の音声を４回聞かせたい場合､ただ４回流すと２回目でもう生徒の興味と集中力は途切れてしまい、別のことをし始める。そこで教師はリピートやシャドーイング練習を何回かするときに、１回目は本を閉じて聞く、２回目は本を見ながら聞く、３回目はボソボソ言ってみる、４回目は気持ちをこめて役者になって言ってみるなど、バリエーションを増やすことを意識している。また、生徒を教師役にするというのをメキシコ人の中高生は楽しんでするので、リピートをする際に教師が言ったものをリピートする以外に、１人の生徒が教師役になり他の生徒がそれを繰り返すという活動も変化があって良い。

また、教科書にある以外の写真や動画の使用も積極的に行っている。中高生は、成人に比べると社会経験が少ない。そこで教師はトピックやその日の学習内容に合った写真や動画を授業に頻繁に取り入れて、少しでもイメージが湧きやすいようにしている。また、授業にメリハリをつけたり、生徒の興味をひいたりするという点でも効果的だ。

３つ目は、活動の意義や目的を明確に提示するということだ。高校生のクラスでは誰かがそれを理解していなくても、他の生徒が注意したり教えてあげたりする。しかし中学はそれがないので、意義や目的がわかっていないと生徒は無駄なことをしていると感じてしまい真剣に取り組まなくなる。例えば、クラスメイトにインタビューをして答えを表に書きこむという活動も、何も言わないと表を埋めることを目的として、母語で聞いたり他の生徒の表を丸写しした

りして終わるという生徒も出てくる。シャドーイングをする際には、その意義や目的をはっきりと言ってから始めないと、“よくわからない活動を繰り返している”と感じて口を開かなくなる。

3.2　教師が観た生徒の変化

この３年間で見えてきた『まるごと』で勉強してきた生徒の様子を、良い変化と問題点とに分けてまとめた。

良い変化は、日本語を使うことへの姿勢の変化である。まず授業内での教師と生徒、または生徒同士の会話の中で、日本語の使用が増えた。そして授業外でも、廊下で教師とすれ違ったときに日本語で挨拶をしたり、ちょっとした会話をしたり、中には授業で紹介した会釈ができるようになった生徒もいる。また、併設している日本人学校の生徒との交流授業で自己紹介をするとき、躊躇することなく堂々と自分について日本語で話していた。これは、自分について話すトピックがスパイラルで教科書に出てくることや、日本人の訪問者があるときなどに授業内で自己紹介をして、よく復習できていたからではないかと考えている。

問題点は、２つ挙げられる。１つ目は、初めからスムーズに進んだクラスは少なく、どのクラスも『まるごと』の流れやパターンに慣れるのに１年かかったということだ。特に時間がかかったのが、協働学習だ。初めはわからないことがあると何でも教師に質問していたが、半年ほどすると誰かの質問に別の生徒が答えるようになり、１年経つ頃には教師に聞くよりも先に生徒同士で解決しようとするようになった。これは、『まるごと』学習経験１年目から２年目になった生徒の変化で一番大きいものであった。また、中学生は１年かかったが、高校生は半年ほどで変化が見え始めた。

２つ目は、クラスコントロールである。特に中学生は思春期で全般的にクラスコントロールが難しい。『まるごと』を使用することで、カラー印刷や写真の多さで興味を引きやすくなったが、依然として教科書以外に色々な工夫が必要である。

3.3.　生徒の反応　－生徒に対するアンケート結果－

それでは、教師は 2.1 のように中高生に『まるごと』を使用することに成果があると感じているが、生徒たちは実際どう思っているのだろうか。リセオで『まるごと』で日本語を勉強している中高生を対象に、アンケートを実施することにした。

アンケートは資料１の内容になっており、アンケート内のメリットとデメリットの選択肢は、リセオで『まるごと』の授業を担当している教師が予想するものを元に設定した。『まるごと』導入前から使用している『みんなの日本語』と比べた生徒の反応、生徒の興味をひくもの、年齢的なものや文化的なものでリセオの生徒に合っている、または合っていないと感じられる点

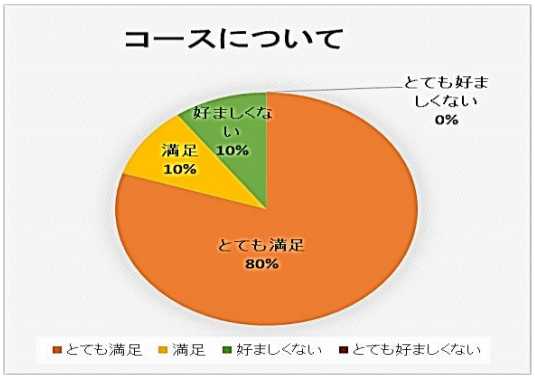
などを教師間で出しあった。表２は、アンケートの対象者について示したものである。A1 の中学生には、中学入学時の新入生と、リセオの小学校で以前から日本語を勉強していた生徒が混ざっている。また、成績不振で『まるごと　初級１』（以下、A2-1）に上がれず A1 を再履修した生徒もいる。尚、A2-2 の生徒は６月に高校を卒業してしまったため、アンケートは実施できなかった。

表２　アンケート対象者

	中学	高校
A1 （『まるごと』１年目）	73 人／77 人中	10 人／11 人中
A2-1 （『まるごと』２年目）	22 人／23 人中	５人／５人中

3.3.1 『まるごと』の内容について

『まるごと』コースと教科書に関しては、レベルや年齢に関係なく約 90%の生徒が「とても満足」または「満足」と答えている。日本語への関心（資料２参照）も全体的に肯定的で、中には「変化なし」と答えている生徒がいるが、それらは「初めから興味・関心があったから」という生徒が多い。これらから、ほとんどの生徒が『まるごと』で勉強することに満足しているということがわかる。



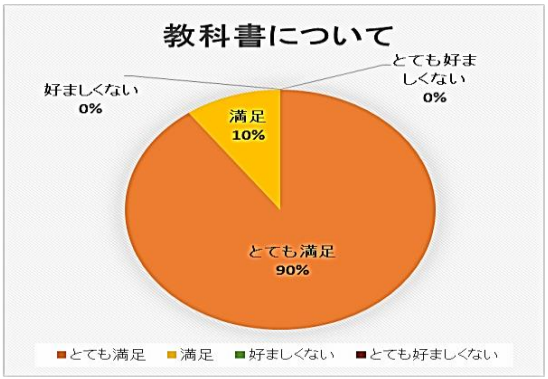


図１　アンケート結果（高校 A1）

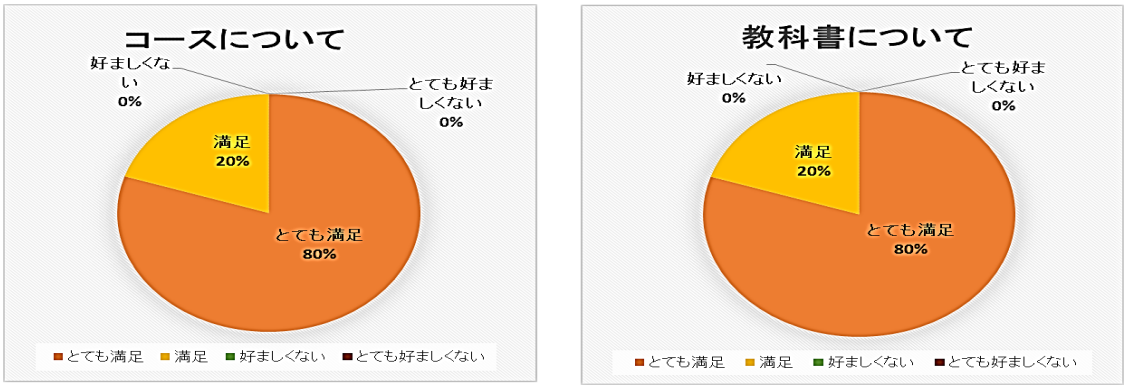


図２　アンケート結果（高校 A2-1）

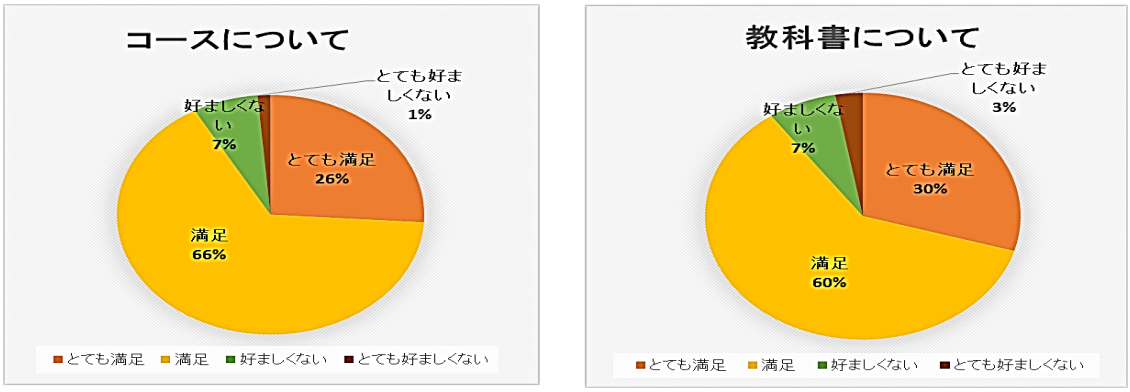


図３　アンケート結果（中学 A1）

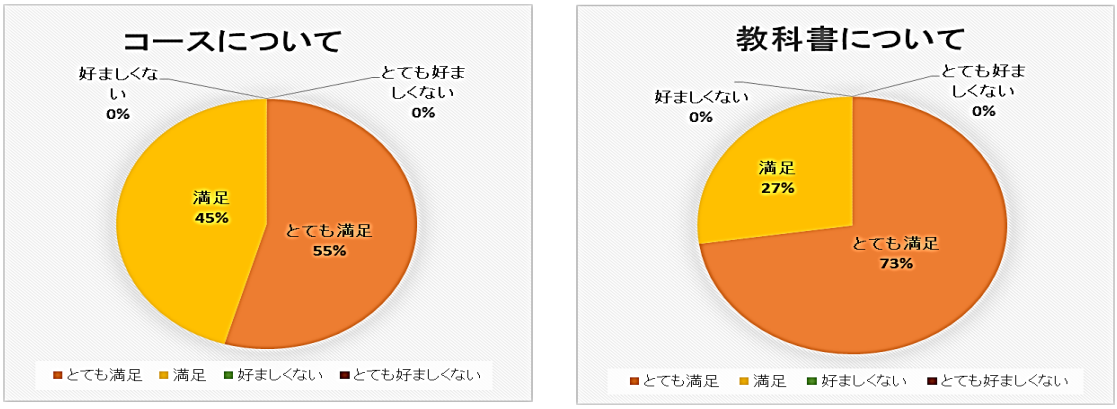


図４　アンケート結果（中学 A2-1）

3.3.2　中高生が考える『まるごと』で勉強するメリットとデメリット

では具体的に、『まるごと』で勉強することの何をメリットまたはデメリットと感じているのか。メリットとデメリット合せて 17 のアンケート項目ごとにみていく。

（1）メリット

「実用性」「写真が多い」はレベルや年齢に関係なくメリットの上位に入っている。

「カラフル」が高校ではメリットの上位に入っているが、教師側の予想に反して中学生の上位には入らなかった。しかし、「写真が多い」と共に“興味を引くから”“理解の助けになるから”“学習意欲を湧かせるから”という理由で選んだ生徒もいた。

「実用性」に関しては、授業で習ったことをすぐに廊下ですれ違う日本人の先生や日本コースの生徒に使えるということがある。実際に挨拶や天気についての話をよく生徒とする。“通じた”や“使えた”という実感が得られるのは生徒のやる気にも繋がる。また、夏休みにリセオが実施している高校生対象の文化交流旅行団というプログラムで約１か月日本に行った『まるごと』クラスの生徒に実施したアンケートによると、ホームステイで家に入るときや出かけるときなどの日常的な挨拶や天気に関する話をしたとき・買い物するとき・料理を注文するとき・地図を見るときなどに『まるごと』で勉強したことが活きたという意見があった。

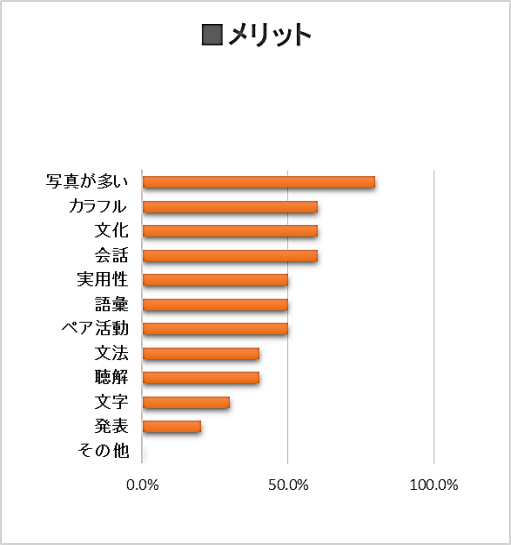


図５　アンケート結果（高校 A1）

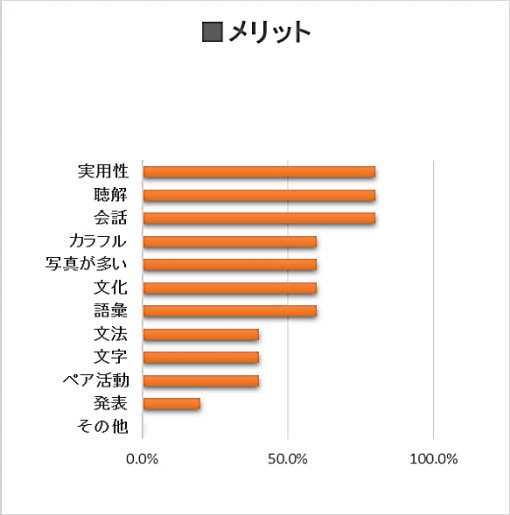


図６　アンケート結果（高校 A2-1）

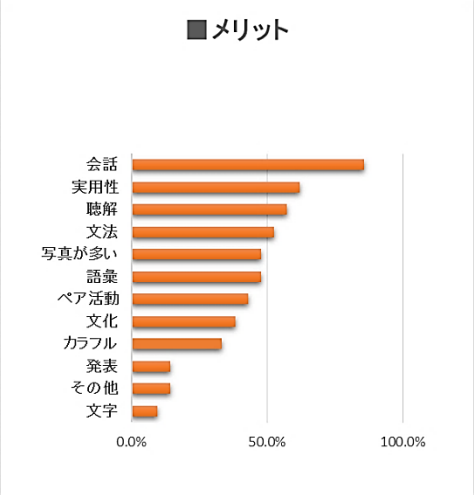


図７　アンケート結果（中学 A1）

（2）メリットにもデメリットにもなっている項目

「会話」は、それが“実用的だ”と感じている生徒が多いようだが、デメリットに挙げている理由は“難しいから”“習得するのが大変だから”がほとんどだった。これは日本語の会話が難しいということで、教科書の問題ではないと考える。

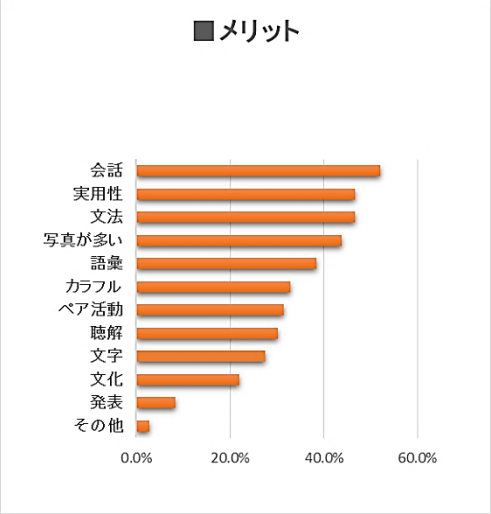


図８　アンケート結果（中学 A2-1）

「聴解」が A1 では下位だが A2-1 になると上位に入っている。これは、『まるごと』学習歴２年目になり、聴解問題は全部を理解するのではなく必要な部分を聞き取るというパターンに慣れてきて、あまり問題を感じていないからではないか。A1 だとわからないときに「何もわからない」という言い方をする生徒が多いのだが、A2-1 になると“わかるところがある”という考え方になり A1 での１年間で身に付けた推測する力を使えるようになる生徒が多く見られる。そして、今まで自分がやってきたことがわかるようになった、できるようになったという実感がモチベーションにも繋がっているように思う。

（3）デメリット

「文法」は、ほとんどのクラスで一番難しかったという結果になった。文法が難しいのは教科書のせいではないが、特に A1「りかい」編の四角を使った文型の提示は、中学生だとなかなか文型の構成が理解できないときがあった。中学生、とりわけ『まるごと』１年目の A1 の

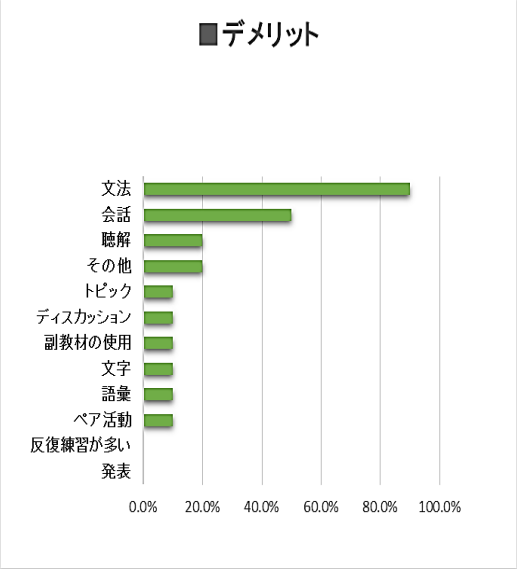


図９　アンケート結果（高校 A1）

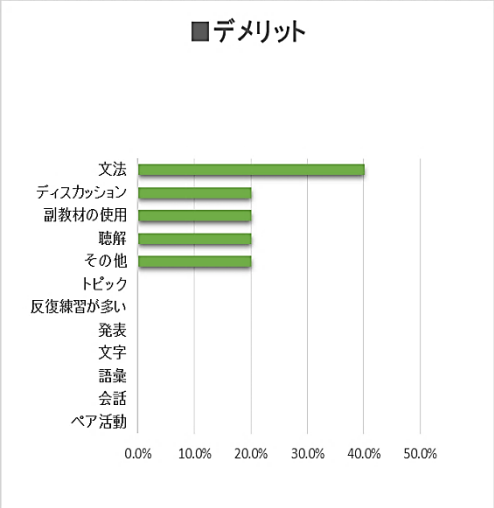


図 10　アンケート結果（高校 A2-1）

生徒は応用力や推測力がまだ発達しておらず、会話例から自分で文型の構成を推測するというのは難しい。例えば A1 L7 P.70 の 2 で文型が提示されているが、四角がたくさんあり、その四角に何が入るのか自力では文型を整理できない生徒がいる。そこで、他にどういう例文があるか生徒に問いかけるなどして、教師が生徒の

気づきを誘導し、授業でしっかり確認するようにしている。また、中高共に中には“教科書の文法についての説明が足りなかった”や“もっと活用について説明がほしかった”という意見もあった。『まるごと』を使用して授業を行うようになり、教師側も文型を教えるというよりは“いつ使うのか／シチュエーション”や“説明するのではなく生徒に気付かせる”ということを意識して教えるようになった。そうなると意識の低い、授業中に話を聞いていない生徒は情報をキャッチできず遅れをとり、「りかい」編のテストの点数も悪くなる。その結果“文法が難しい”、または“説明が足りなかった”と感じるという悪循環になっているとも考えられる。

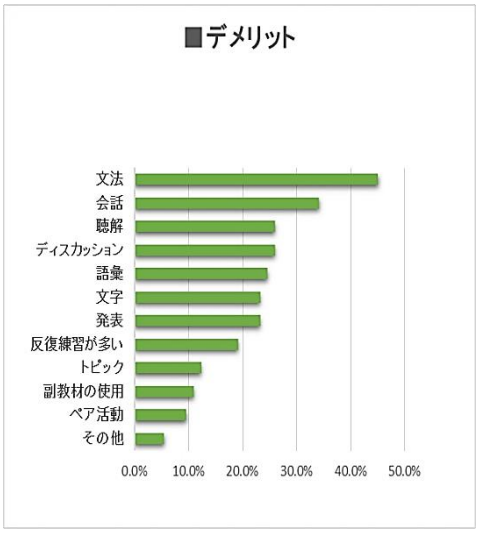


図 11　アンケート結果（中学 A1）

「ディスカッション」は、教師も生徒も難しいと感じている。高校生になると大分ディスカッションらしく意見交換ができるようになるので、アンケート結果からもデメリットに感じている生徒が少ないことがわかるが、中学生だと自分の意見を言うのが精いっぱいで、討論にならないことが多い。

「文字」は、リセオが力を入れている点である。中高生の場合、成績不振の生徒が文字が弱いということが多い。そして中高生、特に中学生は、自分は文字が弱いという自覚があったとしても、自分で努力して他の生徒に追いつこうとする生徒はとても少ない。そこで教師側からの働きかけが必要となる。また、年齢的に吸収が早いのでこの頃から文字指導を徹底して、その後は別の指導に力を入れるということもできる。

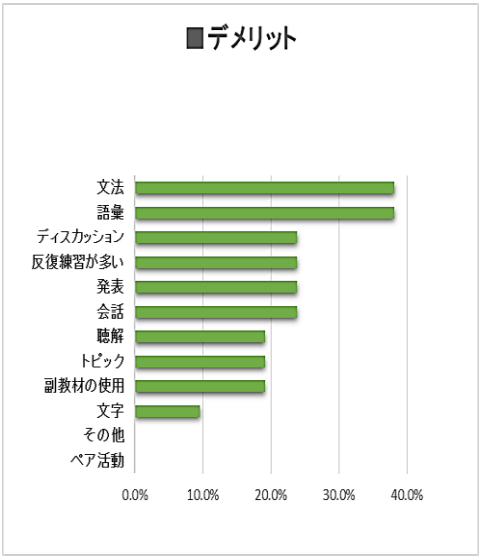


図 12　アンケート結果（中学 A2-1）

特に中学生は導入には JFMC とリセオ作成のアソシエーション（資料３参照）を使用し、プリントや宿題で教科書以外でも文字を扱っている。また、A1 段階から授業中のミニテストで平仮名の読みと書きを扱い、A2-1 ではカタカナを書くミニテストも実施している。各学期末テストでは A1 でひらがなの書きを 100%、A2-1 以上ではカタカナの書きを 100%求める文字テストも実施している。そういった取り組みがあるからか、A2-1 は日本語学習歴３年目でほとんど文字に問題がないが、A1 は日本語学習歴１～２年目で、生徒によっては

まだひらがなも怪しい生徒もいるものの、A1 終了時にはだいたいの生徒がひらがなを 100%書けるようになる。

A2-1 で「語彙」が上位に入っているのは、内容が A1 よりも難しくなり語彙も増えたことによるのではないか。

「発表」は、特に中学生は年頃だからか、クラスの皆の前で発表するのは“恥ずかしかった”“緊張した”という意見があった。

また、デメリットの「その他」に“漢字の書き順が本になかった”と書いている生徒がいた。

（4）その他

＜スイカ割り＞

「文化」は、授業内ではトピックに沿って、例えば朝ごはん(A1)・相撲（A1)・タクシー（A1)・日本の四季（A2-1)・居酒屋(A2-2)など動画を使ったり、そば・味噌汁試食（A1)・スイカ割り(A2-1)・将棋　(A2-1)・ピクニック（A2-1)・梅干し試食（A2-1)など体験型の活動を入れたりしている。また、授業外でも水書道・調理実習・三味線コンサートなどを定期的に行い、力を入れている。これらと生徒が捉えた「文化」とが一致しなかったのか、メリットの上位には入らなかった。「文化」をメリットに選んだ生徒の中に、“日本の生活を感じることができるから”“食べ物について学べたから”という意見があった。

＜水書道＞

中高生には合わない、または体験したことがない「トピック」を勉強することについて、教師側はデメリットの上位に入るかと思っていたが、生徒たちはあまり問題視していないようだ。

中高生は成人に比べて同じことの繰り返しだとすぐ飽きてしまうため、「反復練習」をあまり好まないと予想していた。高校生は復習することやリピートやシャドーイングといった練習の繰り返しもその意義をわかっているのであまり問題はない。高校生で「反復練習」をデメリットに挙げた生徒はいなかったことからもわかる。しかし中学生の場合は“一度やったこと＝繰り返し”や“同じパターン＝繰り返し”と捉える。そこで 3.1 で述べたような活動にバリエーションをもたせるよう教師は意識して授業を行っている。中学生では、クラスによって結果にバラつきがあったので、教科書というよりは生徒の性格や担当教師のやり方が影響しているのではないか。以前から意識して取り組んできていることだが、引き続き教師間で情報交換や教材研究をして一人一人が工夫を重ねていく必要がある。

「ペア活動」と「副教材の使用」はデメリットではないようだ。しかしデメリットに「ペア活動」を挙げていた中学生は、“自分のペアがきちんと授業に参加しない、または作業をしない

から”が理由だった。これは高校生には見られなかったので、中学生特有のものである。

４．これからの課題

今回の実践を通して、今後改善していくべきだと感じた点が５つある。

4.1　副教材の使用

ほとんどのクラスで「文法」がデメリットの上位にあがり、日本語の文法の難しさ以外にも“教科書に説明が足りない”という意見があった。この解決には文法解説書の使用がいいのではないか。兼ねてより「エリンが挑戦！にほんごできます。」や「まるごとプラス」は授業中にも使用してきたが、JFMC の web サイトにある文法解説書（スペイン語版）については、URL の紹介のみで実際に授業中にサイトに入って見てみるということは少なかった。特に中高生は授業以外のところで自主学習をするということがあまりなく、有用性や必要性を実感しないと動かない。今回このような意見が出たことで、URL の紹介だけでなく、実際に授業で使用してみて、こういう自主学習の方法もあるというのを１つの選択肢として提示することが必要だと感じた。

また、“漢字の書き順がなかった”という意見にも同じことが言えるのではないか。漢字導入時に「まるごとプラス」の漢字のページを使って書き順を確認する日があってもいいし、JFMC の web サイトにある漢字練習帳を宿題に出す日があってもいいだろう。同じテーマを色々な方法で学習するのは、飽きやすい中高生にも効果的である。

4.2　中高生に合わないと考えられるトピック

リセオでは高校生で A2-1 の「出張」というトピックを扱ったことがある。メキシコ人の生徒は明るい性格の子が多く、その時は、内容は変えず、生徒がサラリーマンに成りきることで特に問題なく進んだ。A2/B1 の「結婚」というトピックは、高校でもまだ扱ったことがなく、カリキュラム的に中学生ではそのどちらもまだ扱ったことがない。アンケートでも「トピック」については、生徒は問題視していないということがわかったが、それは上記のようなトピックをまだ扱っていないからかもしれない。今後、中学生が「出張」など本人たちが経験したことがないトピックについて勉強する可能性も出てくるので、その際にそのまま扱うのか、一部を変えるのか、トピックごと変えるのかなど、どう扱うか考えていかなければならない。

4.3　ディスカッション

ディスカッションに関しては、教師も生徒も難しいと感じていることがわかった。リセオでは A2-2 クラスでも、ディスカッションは母語を主体に行っている。そもそも中高生ができるディスカッションとはどんなものなのか。日本語以外の教科でもディスカッションは行ってい

ると思うので、リセオの他教科のメキシコ人教師にアドバイスをもらったりして、中高生のディスカッションというものを今一度見直す必要があると感じた。

4.4　小学校との連携

2015 年８月からメキシココース中学部と高校部の日本語クラスは使用教科書を『まるごと』に一元化することになった。以前は中学進学の際に行われるプレイスメントテスト並びにその後の『みんなの日本語』に繋がるような日本語教育を小学部では行っていたが、中学部と高校部の『まるごと』一元化にあたり、以下のような取り組みをする予定である。

まず、中学進学時に A1 からではなく A2-1 クラスから始められる生徒を育てるような内容で授業を行うことである。例えば、小学校高学年のレベル別クラスで A1 の漢字を従来の授業内容に新たに取り入れるなどである。そして学年やレベル別クラスに関係なく、文字指導の徹底と、インプットからアウトプットを意識して授業をすることを今後実行していこうと考えている。

4.5　自己評価

また、今回のアンケートには入っていない「自己評価」も大きな課題である。今、リセオではどの『まるごと』クラスも Can-do／日本語チェックでのコメント記入と、各学期末テスト後のフィードバックでのコメント記入が自己評価をする場となっている。元々メキシコ人は自己評価をすると現状よりよく見せようとする傾向があるように思うが、それ以外に年齢的に自分を振り返るということが特に中学生は上手くできない。自己評価の方法や、ふりかえりでの活用の仕方を改良していかなければならないと感じていることに加えて、そもそも中高生に効果的な「自己評価」をすることは可能なのかが問題である。上記の課題と併せて、今後取り組んでいきたい。

５．おわりに

リセオでは各学期に１回ずつ、「りかい」と「かつどう」それぞれテストを行っている。中学が年に５回、高校が年に４回テストがあり、１回のテストでだいたい３～５課分が範囲となっている。『まるごと』導入から今までの生徒の成績は、内容の難しさに比例して下がっている生徒もいるが、全体的には大きく下がることはなく A1 から A2-1、A2-1 から A2-2 と進んでいる。中学３年生が春休みに２週間日本へ修学旅行に行った際、その中に『まるごと』クラスの生徒もいた。その『まるごと』クラスの生徒たちが、発話に対して物怖じせず積極的に日本語を使っている姿や、教科書に出てきたものや風景が目の前にあって興味を示している様子が見られ

たそうだ。また、毎年日本語能力試験に挑戦する生徒がいる中で、一昨年と去年の『まるごと』クラスの生徒たちの奮闘ぶりは、「みんなの日本語」で長年勉強してきた生徒たちに劣らぬものだった。

今『まるごと』クラスはリセオの日本語クラスの中の一部のグループではあるが、このようにいい結果が出てきており、2.1 で述べた目標を十分達成していると感じている。それを踏まえて、2015 年８月からメキシココース中学部と高校部の日本語クラスは使用教科書を『まるごと』に一元化することになった。これから 400 人近いリセオの中高生が『まるごと』で学び、どのように変化していくのか、とても楽しみである。

［注］

(1) 「日本の伝統文化を体得する中から、理論よりも体験を通して学び、学んだことを発表する表現力を養う」を目的とし、食（寿司・お弁当・和菓子）・武道（空手・剣道）・音楽（和太鼓・雅楽）・文学（短歌・小説）・美術（書道・版画）・演劇（能・歌舞伎・映画）などを扱う。基本的には母語で授業をする。

資料１：アンケート（報告者訳）

アンケート

『まるごと　日本のことばと文化』クラスに関して、以下の質問に答えて下さい。

１．　コースについて、どう思いますか。

1. とても満足　2. 満足　3. 好ましくない　4. とても好ましくない

２．どうしてですか。

３．『まるごと　日本のことばと文化』の教科書について、どう思いますか。

1. とても満足　2. 満足　3. 好ましくない　4. とても好ましくない

４．どうしてですか。

５．日本語の授業を受けて、日本語に対する興味が強くなりましたか。

1.はい　2. 変化なし　3. いいえ

６．どうしてですか。

７．中学／高校で『まるごと　日本のことばと文化』で勉強するメリットは何だと思いますか。

（複数回答可）

1.カラフル　2. 写真が多い　3. 文化が学べる
4. トピックが実用的　5. 文法　6.聴解　7. 文字
8. 語彙　9. 会話　10. ペア活動
11. クラスメートの前での発表
12. その他(　　)

８．どうしてですか。

９．中学／高校で『まるごと　日本のことばと文化』で勉強する難しさは何だと思いますか。
（複数回答可）

1. トピック　2. ディスカッション　3. 反復練習が多い
4. 副教材の使用　5. 文法　6. 聴解　7. 文字
8. 語彙　9. 会話　10. ペア活動
11. クラスメートの前での発表
12. その他(　　)

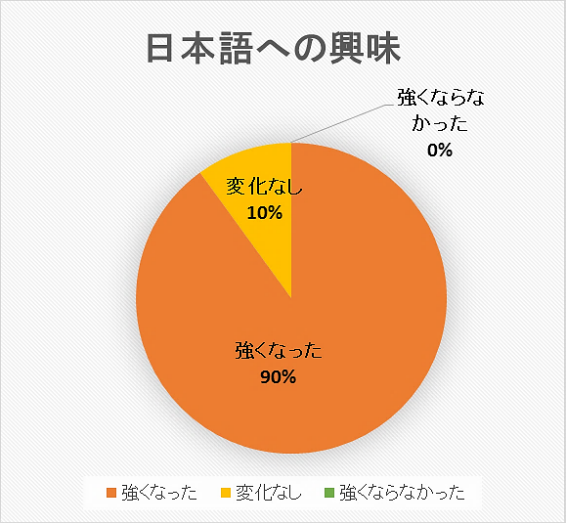
10. どうしてですか。

11. クラスに関して自由に意見を書いてください。

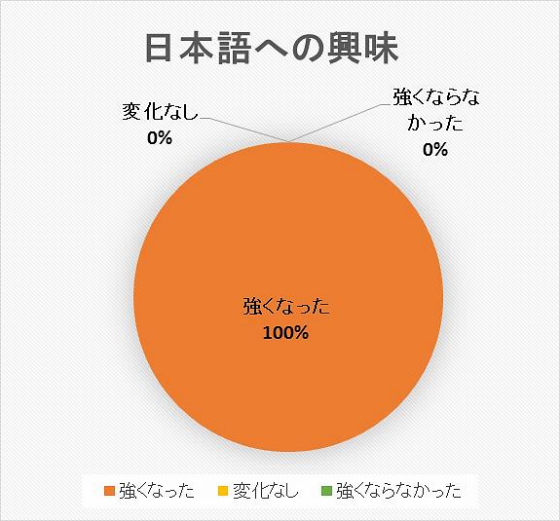
先生に提出してください。ありがとうございました。

資料２：アンケート結果

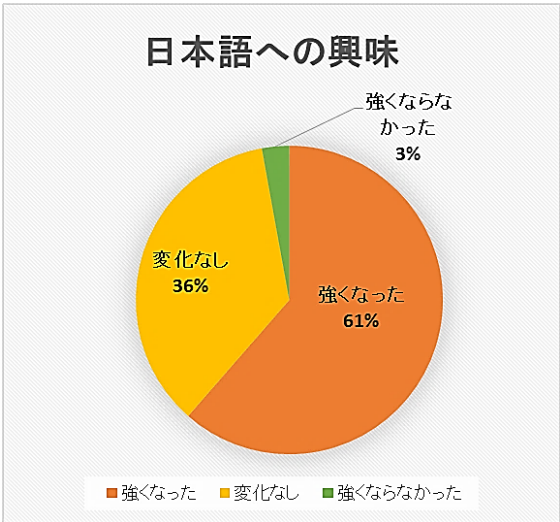
高校 A1



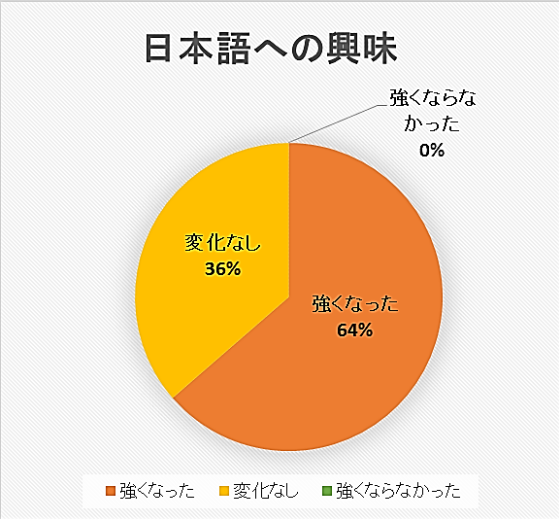
高校 A2-1



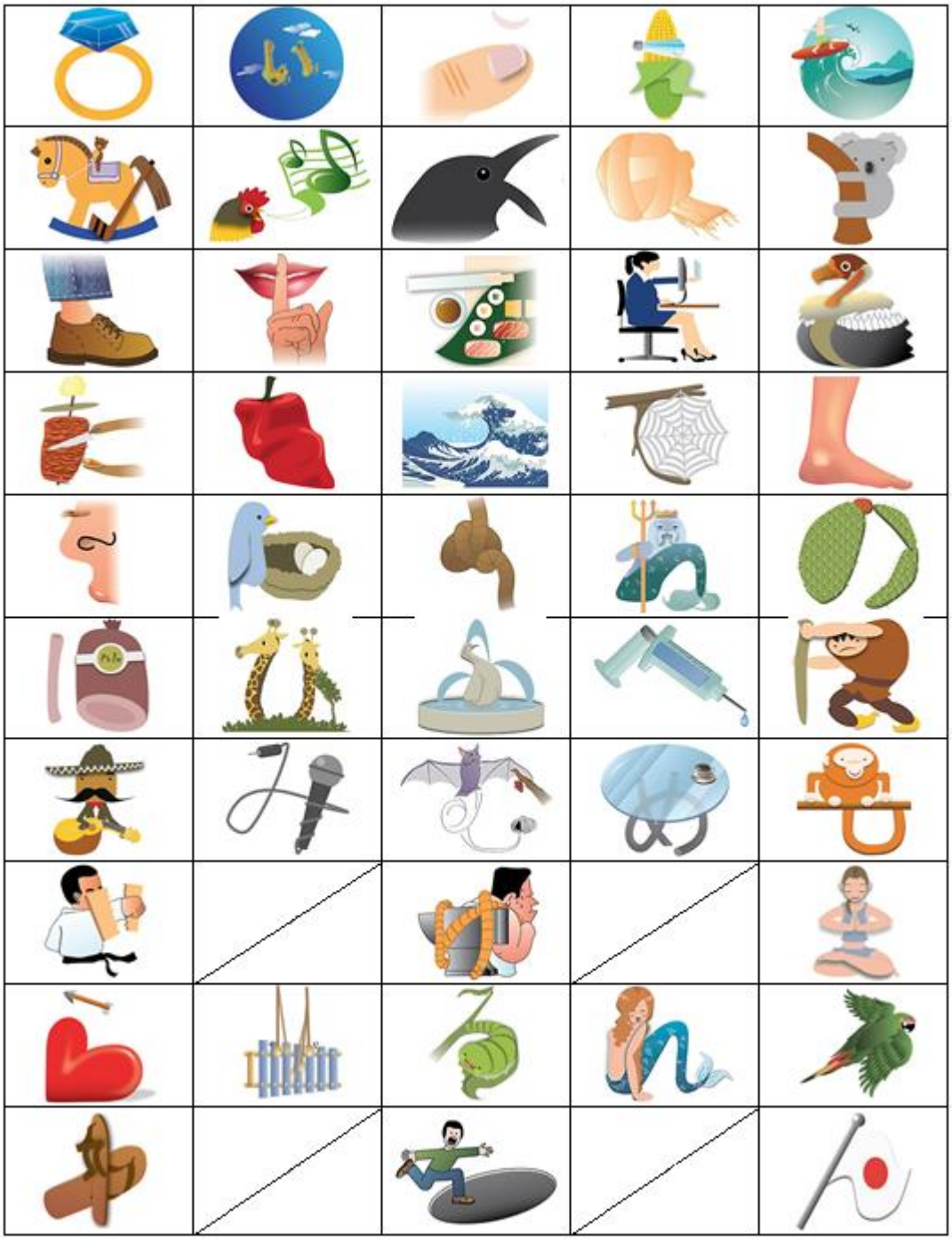
中学 A1



中学 A2-1



資料３：文字指導用アソシエーション（オリジナル）

なまえ（　　）

ひらがなを　かきましょう。